

学校
法人 関西文理総合学園

1946-2010

建学の理念に導かれて

関西文理総合学園の歩みと長浜バイオ大学の課題

建学の理念に導かれて

関西文理総合学園の歩みと
長浜バイオ大学の課題

1946-2010



Wind of
Peace and Freedom

建学の理念に導かれて

関西文理総合学園の歩みと

長浜バイオ大学の課題

【も く じ】

第1章 京都人文学園の誕生とあゆみ

それは、1946（昭和21）年から始まった……………	8
戦後公教育の整備前に、いち早く生まれた「京都人文学園」……………	11
因習に束縛されない民主主義教育を実践……………	12
音楽、工芸、絵画系の研究科も開校……………	13
新教育制度整備にともない予備校事業に着手……………	14
全人教育めざしユニークな「進学者教育」を実施……………	16
人文学園の「分身」として、関西文理学園の誕生と京都勤労者学園の発足……………	18
戦後の私学教育と市民教育に先駆的な試み……………	21
高い評価を得た「進学者教育」の内容と方法……………	23
「私学危機」で予備校事業が危機に……………	25
大学法人への発展統合で「新生・関文理」をめざす……………	28
わが国の教育史上貴重な遺産と教訓を将来に生かす……………	30

第2章

人文学園の理念と伝統を活かした関西文理学園の総合的な教育事業

総合的な学園づくりで新時代を担う人材育成へ……………32

1 情報・経理の専門技術者の養成―会計・ビジネス系専門学校を開校……………33

2 バイオテクニシヤンの養成―専門学校・バイオカレッジ京都を開校……………35

「産学協同」でユニークな教科と学校経営……………37

「少子化」と大学との競合で生徒激減……………39

3 留学生を対象に国際的な進学教育―予備校に国際進学コースを開設……………40

第3章

初めて大学事業に挑戦―全国で唯一のバイオ系単科大学を開学

文科省へ申請時の難題と困難……………42

共感をよんだ「開学趣旨」……………43

「公民協力型」で「産官学」による大学実現……………44

高倍率の入学生で晴れて開学、スタート切る……………46

学園創立の理念と伝統生かし、「行動する思考人としての高度バイオ人材」の育成へ……………49

本学の開学で長浜市の悲願達成……………50

内外の大学との交流・連携の進展―国際交流活動と、滋賀医科大学との戦略的連携事業……………52

産官学の連携から生まれた「長浜サイエンスパーク」……………53

第4章

更なる発展めざす学園のビジョンと長浜バイオ大学の課題

21世紀の教育・研究課題に真正面から取り組む学園へ……………58

総合的な学園事業のビジョンを示し、「文理融合」による多様な教育事業めざす……………59

「危機」の時代を人類の英知―「教育の力」で革新し転換めざす……………62

関西文理学園グループの沿革……………63

第5章

関係資料

資料① 京都人文学園人文科学部本科講師氏名……………66

資料② 京都人文学園・特別（課外）講義、各種講座の主要講師一覧……………67

資料③ 学校法人関西文理学園歴代理事長・事務局長……………67

学校法人関西文理総合学園役員（2003年法人設立時理事・監事）……………68

学校法人関西文理総合学園役員（2011年12月現在理事・監事）……………69

資料④ 長浜バイオ大学設立発起人……………70

資料⑤ 長浜バイオ大学学長……………71

あとがき……………72

第1章

京都人文学園の誕生とあゆみ

それは、1946(昭和21)年から始まった

「僕たちは疎開したので遅れた勉強を取り戻したいが、米がないので学校に弁当を持って行けない、僕たちに給食をください」

1946(昭和21)年5月2日付の新聞各紙は、前日のメーデーで特別に発言した四谷第六国民学校5年生、橋本実の切実な訴えを報じている。今日では想像もできない物不足、食糧難――15年におよぶ戦争に敗れ、人々は毎日飢えをしのぐのが精一杯という生活を送っていた。

と同時に、敗戦を機に『回転軸』とも表現される価値観の大きな転換に迫られ、人々は新しい理想を求めていた。戦争中「学徒動員」によって、学ぶことを奪われ工場に戦地にと駆りだされた学生たち、あるいは軍国主義思想の呪縛にとらわれて軍隊や軍学校に身を捧げた青年たちは、今度こそ真理を尊び、人々の幸せに繋がる生き方や技術をつかむための学び舎を欲していた。

しかし、明治以来すすめられてきた富国強兵に基づいた国家主義的教育の根は深く、学校の改革は容易に進まなかった。46年の3月に来日したイリノイ大学総長G・スタンフォードを団長とする教育使節団は、それまでの日本の教育について、

「高度に中央集権化された19世紀様式」の国家主義教育であり、「一般民衆には、ある形の教育を、そして特権少数者には他の教育を施す」非民主的で差別的な教育であると批判して

誕生したのは、まさに、このような時代だった。

京都人文学園は、第二次世界大戦の最中、ファシズムに反対する文化誌『世界文化』を刊行していたフランス文学者新村猛氏(後に名古屋大学教授)らの呼びかけによって創立された。新村は、1937年に治安維持法違反によって拘留され、同志社大学予科教授および京都帝国大学講師の職を追われていたが、敗戦によって活動の自由を得るとすぐに「京都自由人協会」を発足させ、治安維持法の廃止を求める運動を進めた。その一方で、新しい教育運動を模索し、青年向けの「近代市民講座」を開講した。講師は、『世界文化』の同人として戦争中に良心を貫いた弁護士能勢克男氏、歴史学者の藤谷俊雄氏(京都市史編纂委員後に部落問題研究所所長)、経済学者の青山秀夫氏(京都大学助教教授後に同大学教授)、社会学者の重松俊明氏(京都大学講師)などが担当し、青年たちに新しい知識と価値観を教えて好評を得た。

市民講座の成功を通じて、新村は本格的な新しい教育運動――「かつての非人間的な圧制のもとでは夢にすぎなかったヒューマニズム教育」――を自ら手がけようと決意する。人間性

の全面開花を目的とした民主主義教育は、「因習に束縛された従来の学校のたぐいによって
は、決して十分に実現されない」（京都人文学園規約）より。従って、「組織と精神をまっ
たくあらたにした私学」（同前）を自らの手によって創立しなければならないというのが、彼
の考えであった。

長いファシズムの抑圧に耐えてきた京都の文化人・知識人の多くが、新村のこの決意を支
持した。さらに同じ頃、自由で新鮮な教育運動を画策していた経済学者の住谷悦治氏（後に
同志社総長）や実業家の堀江友広氏（住谷悦治氏の義弟）らが相呼応して支持・合流するこ
とになり、とくに堀江氏の経済的支援の申し出は、計画実現の具体化を保証することになっ
た。先の藤谷、重松、住谷、堀江のほかに4氏、哲学者の久野収氏（後に学習院大学講師）、
画家の伊谷賢蔵氏、工芸家の上村六郎氏、声楽家の上村けい氏を発起人として、京都人文学
園創立の規約が決議されたのは、1946（昭和21）年3月のことである。

創立時は山口仏教会館（京都市上京区寺町丸太町上ル）を仮校舎とし、翌年に京都市上京
区（現・北区）小山上内河原町21のアパートに移り、本校舎とした。手狭ではあったが総合
受験科150名をふくむ、200名が収容できる教室を確保した。開校時に羽仁五郎氏（歴
史学者）が来演して力説した「Stand of Fall」は、学園の合言葉になった。

戦後公教育の整備前に、いち早く生まれた「京都人文学園」

学園の創設趣意書の中で、学園創立の目的について、

「……今日のわが国の青年男女に対して、生活の新しい理想を示し、謂わばあらたな生き甲
斐を覚えさせ……」

「人類のために、生きとし生けるものの福祉のために尽くすべき世界公民の扶育を念願する
人文主義の精神による教育」を実現すると述べている。

また、学園の教育方針は、

「立身出世の具に供せられ……ひいては観測と推理の力の涵養はおろそかにさせられた」そ
れまでの学校教育に対して、

「基本的な諸学科について、その対象と成立と発達の跡を懇ろに説き、またその研究方法を
教えつつ、自主的な思考人、しかも単に思考に秀でた知識人ではなくて、『行動の人として思
考し、思考の人として行動する』ような近代人を養成する」とした。

さらに、学園には人文科学部のほかに、絵画研究所、音楽研究所、工芸研究所を設けること
が謳われた。

すなわち、

- ① 国家主義・軍国主義と戦争によって、真理を学ぶ機会を奪われた青年に学び舎を提供し、
- ② 人間性（ヒューマニズム）を何よりも尊び、人間的な文化の建設をめざす人文主義を掲げ、

③日本の復興と民主主義の担い手にふさわしい、知的能力とヒューマニズムを兼ね備えたグローバルな（行動する思考人）を養成する、
これが、人文学園の基本像であった。

因習に束縛されない民主主義教育を実践

新村らの呼びかけに応じて、当時の京都と日本を代表する学者・知識人が学園に結集した。そして、その高い講義水準と「一風変わった」理念に惹かれた青年たちが、学園の門をたたいた。

5月21日に行われた入学審査に集まったのは、人文科学部本科の定員50人に対し、243人であった。女子54人、男子受験者189人の中には、軍隊からの復員者あるいは軍学校の在学者など、戦争と敗戦によって就学の機会を失った者も多かった。彼らを放置することはしのびなく、学園は財政や施設の貧困などの問題を抱えながらも、当初の入学定員を倍加し、結局110人（女子21人、男子89人）が第一期生として選ばれた。

生徒たちの就学意欲は高かった。「試験なし、出欠なし」、さらに生徒による自治と、まさに100パーセント自らの自覚と選択に委ねられた授業運営は、一部に無制限な怠惰を生んだのも事実だったが、多くの生徒が授業のほかにも自主的なサークルを開くなどして学習を

続けていった。食糧難や経済的困難によって中途退学する生徒も多く、第一期生として卒業したのは30数人に過ぎなかったが、それだけに、彼らが学園生活からつかんだ有形無形の成果は、その一生涯を貫く思想として育まれていった。

一方、学園の指導者となった講師たちも、「因習に束縛された従来の学校」（「京都人文学園規約」より）にない京都人文学園の可能性を信じ、民主主義教育の実現に力を尽くした。創立当初は校舎とてなく、仮校舎となったのは、京都御所に近い山口仏教会館の大講堂一室と二つの控室であった。はげ落ちた移動黒板だけの「学校」へ、熱心に足を運んだ講師の多くは京都大学の出身者で、滝川事件のあと『世界文化』や『土曜日』などの雑誌を通じてファシズムに抵抗し続けた人々であった。それだけに、いわゆるアカデミズムの教授たちとは一味違った、強烈な個性で学生を魅了した。そして誰もが一様に生徒を信じ、期待をかけていた。

音楽、工芸、絵画系の研究科も開校

また学園の運営は規約によって厳しく定められ、財政支援者からの独立と教授会自治、さらに生徒の運営への参加を定め、従来の私学には真似のできない民主的運営が図られていた。人文科学部の開設に前後して、人文学園音楽研究所、同工芸研究所、同絵画研究所が相次

いで開校した。

音楽研究所は京都女子専門学校講師であった声楽家の上村けい氏など、京都音楽界の若手・中堅の音楽家を指導者として、1946年5月11日に開校した。同研究所には、音楽教育においては特に幼少時からの指導が才能の開花を決めるとした、上村けい氏の主張に基づき、幼児を対象とした初等部と国民学校（小学校）児童・中学校生徒を対象にした中等部が置かれ、そのレベルの高さと指導者の意欲が市民の注目を集めた。初年度には175人の生徒が入学し、学校は活力に溢れた。

6月16日に開校した絵画研究所も、初等部・中等部を置き、さらに美学・美術史、自然科学、映画論、仏文学、政治・経済、思想問題などの基礎一般講義、また職業・学歴を問わず絵画を学びたいものに門戸を開いた日曜部などを設け、初年度入学者62人で出発した。

また、工芸研究所は6月8日に開校し、上村六郎氏らの指導のもとに15人の生徒が集まった。

新教育制度整備にともない予備校事業に着手

しかし1947年、アメリカ教育使節団の勧告に従って、六・三・三・四制を軸とする新しい教育制度が整備され、敗戦で廃校になった旧軍学校に属していた青年たちの大学・高校

への転入措置が進む中で、人文学園への入学希望者は激減し、学園の財政は悪化していった。1949年には、働きながら学ぶ青年を対象とした「夜間部」が設置された。だが、史上空前のインフレ、出口の見えない経済危機と大規模な人員整理、加えて低賃金による中退者も多く、学園財政は悪化の一途を辿った。それにより1950年2月をもって、遂に「昼間部」は閉鎖された。

一方、高等教育への進学希望者が増大する中で、「大学浪人」もまた激増していった。今日のように予備校の数も多くない時代、浪人生とりわけ地方で浪人生活を送る青年にとって、合格に必要な受験学習をほどこし、進学への意欲を励ます良心的な予備校の存在は切なる願いであった。

当時、人文学園夜間部の主事を勤めていた儀我正三郎氏は、創立以来の学園主事佐々木時雄氏（政治学者、後に京都市動物園長）や学園でドイツ語講師を勤めていた臼井竹次郎氏（京都府立医科大学教授）、北村敬直氏らと図り、昼間に空いている校舎を使って受験予備校を開設する計画を立てた。直接的には、予備校開設によって人文学園の財政基盤強化の一助になればという、思惑もあつたことは事実である。人文学園創立以来の目的、すなわち「青年に学ぶ場を」の精神を、「進学への希望を援助する」という形で新しい教育事業に具現化するという、創立理念に基づいていたことはいまでもない。人文学園の運営委員会は、新しく大学受験の教育機関としての予備校事業を開始していく提案を積極的に支持し、講師団も挙げて賛同し協力した。予備校の名称は「関西文理学院」と名付けた。こうして1951年、

人文学園は新たに予備校事業にも着手することになった。

全人教育めざしユニークな「進学者教育」を実施

既述のとおり1951年、人文学園は、関西文理学院を予備校として開設したが、人文学園の教育理念と精神を受け継いで、当然のことながら既設の他の予備校では実現できない、ユニークな取り組みを様々に試みた。

①まず、単なる受験学習のみに終わらず、「自主的な思考人を育てる」という人文学園のめざした理念に鑑み「文理融合」の、総合的な授業が推進された。生徒一人ひとりが将来への展望を持って、大学進学への意欲を高めることができるように、一般の学科講義のほかに「教養講座」「大学紹介講座」「学部紹介講座」などを、他の予備校よりも早く設置したのは、この理念の具体化である。人文学園の質の高い豊富な講師陣が、そのユニークな教育内容を支えた。ちなみに講師陣には、阿部知二氏はじめ永井智雄氏、古在由重氏、矢川徳光氏、松本清張氏など、各界最高の文化人が来演、会場はあふれかえる盛況ぶり、学院の信頼と権威を高めた。又、講演会会場や校舎の目立つ場所には、「未来にはばたく確信を」というスローガンが掲げられ、学生たちの学びへの情熱、志の高さを示した。



学院創立7周年記念に際して、関西文理学院創立者の一人、新村出先生の揮毫

②また学園時代の「生徒が主人公」の精神は、当初、地方出身の入学希望者への下宿斡旋に始まる生徒への生活相談として具体化された。さらにクラス制の導入とホームルームアワーを通じての集団的な学習・生活指導によって、生徒が互いに励ましあって成長する場を保証したり、また学習進学相談室における専任の担任による個人相談など、あくまでも生徒の立場に立って進学への希望を実現する取り組みは、他の予備校の注目を集め優れたモデルとなった。

③70年代に入って学生自治会が結成されるなど、他の予備校には決して真似のできない学園の民主的運営によって、講師、職員、生徒からの提案がその時々運営に活かされ、関西文理学院は順調に発展した。

それまでの「予備校教育」の枠組みの中では決して実現されることのなかった、これらの教育内容、運営内容は、「進学者教育」と呼ばれた。すなわち、ここでは生徒が主人公であり、それが故に生徒らに大学進学を保証する確かな学力とともに、大学での学問の基礎となる力をつけ、各教科の本質に迫る体系立てた勉学を可能にすること。そして、有意義な大学生活を通じて、社会人としての豊かな人生を花開かせるための全人教育を行う、という教育である。言い換えれば社会と学問と生き方について科学的判断力を身につけ、人類の未来を展望しうる世界観、人生観の基礎を養う教育の場として、期待に応えていくことを目指した。そ

れは営利を追求し、受験教育という名で一方的な詰め込み教育を進める他の予備校と、明確に一線を画していた。

1976年には創立30周年（人文学園創立より）記念祝賀会が京都グランドホテル（現リーガロイヤルホテル）で行われた。京都府知事代理（副知事）、京都府教育委員長、細野武男立命館総長をはじめ、各高等学校校長、各大学より260余名の参加を得て盛大にとり行われた。

そこであらためて、「文理密察（注）の教育の普遍的理念を指針として、学問と教養の正道を踏み誤らないことを常の心がけとしながら、全人教育を志向する」という創立以来の基本理念を確認した。

（注）「文理密察」は、中庸章句三十一章にある言葉で、その意味は「あらゆるものごとの、文（あや）や道理を精密に洞察して、特質を見極める」で、関西文理学院の名称の由来でもある。

人文学園の「分身」として、関西文理学園の誕生と京都勤労者学園の発足

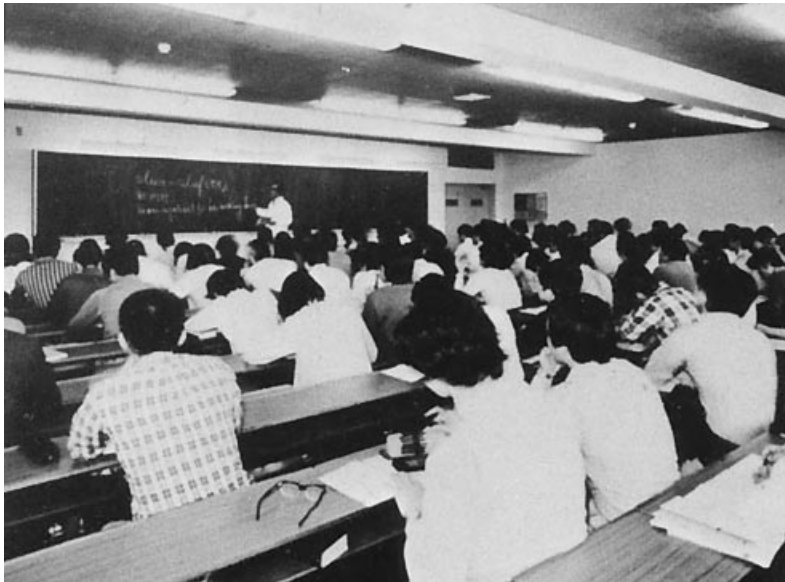
かくして、予備校としての関西文理学院は、開学時には人文学園の校舎で特色のある授業を行い、順調に滑り出した。そして1952年には京都市北区烏丸通鞍馬口東入ルに土地を



烏丸鞍馬口校舎の1号館の全景

購入し、独自に新校舎を建設し、教室も人文学園から移転した。同学院（予備校）は開学当初から人気が集まり、生徒募集も約300名を超える勢いで出発した。一方、財政面でも自立することが出来たので、生徒減少で昼間部を閉鎖（1950年）し、財政悪化で苦しんでいた人文学園に対して、「援助金」という名目で支援を続けた。

ところが、主として勤労者向けの「夜間部」（1949年から夜間1年制に移行）のみの講義となっていた人文学園の方は、学園事業を続けていくことが益々、困難になっていた。運営委員会で維持・継続していくための方策がいろいろ検討されたが、打開策は見つからなかった。財政面ではほぼ行き詰まり、予備校（関西文理学院）からの援助金（三年間の期限付）に頼るにも限界があった。学園の役員会では、勤労者教育に重点をおいた「夜間部」と、新しく発足した予備校事業との統一運営を図り、人文学園を存続していく道



熱気に溢れる教室での授業風景

はないものか、真剣な議論を重ねた。学園の存否をめぐる講師と学生の間で激論がかわされ、危機を憂慮した学生有志たちは、「学園危機突破のための同窓会」を結成し、事態の打開のために動いた。

しかし、有効な危機打開策は見出せず、結果、人文学園は予備校事業と勤労者教育事業の二分野に分かれ、組織的にも二つの事業組織に分離・独立して教育事業を、進めていくことになった。

すなわち人文学園は、既存の「夜間部」を継承・発展させた「勤労者教育機関」として存続していくこと。一方の予備校（関西文理学院）の方は、人文学園の「分身」として、すでに教学・校舎・財政ともに自立できる力量を備え、将来展望も描いたので、独自に法人化することも視野に入れて、「進学者教育」を特徴とする、予備校事業を本格的に実施していくことになった。

勤労者教育を実施していくことになった人文学園は1956年、京都の労働組合、労働者の教育組織として活動していた「京都勤労者教育協会」との統合の話合いが急速にすすみ、新校舎も確保することができたので、一体化することに成功した。そして、翌年の57年3月、「社団法人・京都勤労者学園」を新しく設立した。

戦後の私学教育と市民教育に先駆的な試み

人文学園が勤労者学園に発展的に改組できた背景には、当時、全国に先駆けて誕生した革新的な京都府・市政の、積極的な理解と支援があった事実に触れておかねばならない。一方、予備校（関西文理学院）は1954年に予定通り学校法人の許可が下り、「学校法人・賀茂川学園」が正式に誕生した。関西文理学院（予備校）は、その新法人の主たる学校事業となった。さらに1983年、賀茂川学園から関西文理学院に名称を変更し、紆余曲折はあったがここに名実兼ね備えた京都人文学園の「分身」であり、姉妹学園としての「関西文理学院」が実現することになったのである。

学校法人・賀茂川学園（のち関西文理学院）が許可された時の役員構成は、理事長・浅井清信氏、理事に新村出氏（広辞苑・初版編者）、住谷悦治



各界の多彩な講師による文化講演会（1970年）

氏（後に同志社総長）、和田洋一氏（同志社大学教授）らが名をつらね、学園発展の土台作りに尽力した。1969年の学院長には新村猛氏（新村出のご子息）が就任、指導に当たられたことを付記しておきたい。

こうして京都人文学園は、創立8年（人文学園創立・賀茂川学園設立まで）にして関西文理学園と京都勤労者学園に、発展的に二つの教育事業組織に生まれ変わった。人文学園創立時の教育理念を共有しつつ、相互の共通点と相違点を認め合い、片や勤労者教育に、片や進学者教育（予備校）の充実・発展をめざした。そしてわが国における戦後の私立学校並びに、勤労者・市民レベルにおける民主主義教育活動で、実験的にかつ先駆的な試みを大胆に実践して注目を集め、期待に応えていった。

さらに、人文学園は総合学園として多様な教育事業の実現にも力を注いだ。例えば、芸術部門を構成していた人文学園絵画研究所、同工芸研究所、同音楽研究所は、それぞれ数年後に解散したが、各部門とも行動的な芸術家のグループとして、引き続き創作と研究活動が行われた。特に音楽部門は、上村けい氏、上村六郎氏らの努力によって、京都市立堀川高等学校音楽課程を経て、現在の京都市立芸術大学音楽学部設立の基礎となった。この実績と伝統は、「文理融合」の教育の精神に基づく「総合学園構想」として、関西文理学園のその後の教育事業に、引き継がれていった。

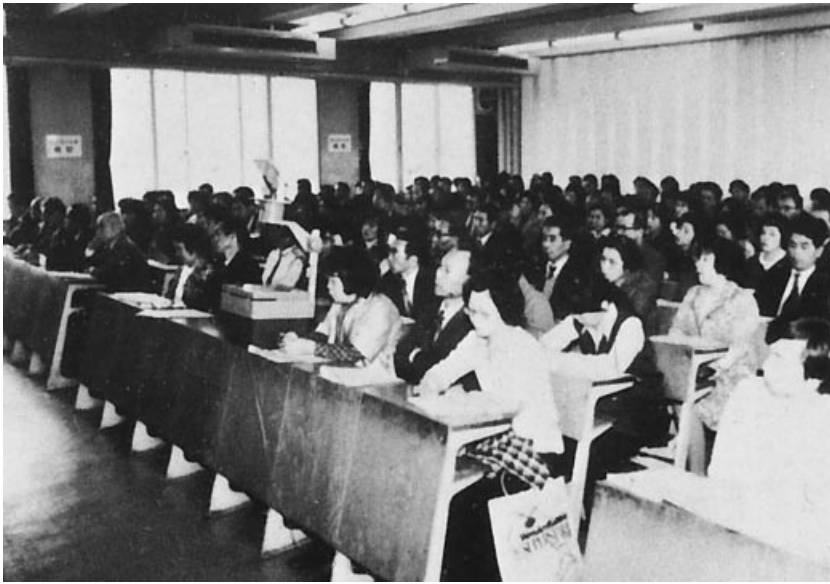
高い評価を得た「進学者教育」の内容と方法

こうして「進学者教育」の推進を掲げた予備校——関西文理学院の教育は、人文学園の教育理念を引き継ぎ、ユニークな教育内容と方法を創り出して期待に応え、生徒募集も最高時（1967年）には4,480名に達するなど、想定を超えて発展していった。

一般の「受験学習」と学院の特徴とする「進学者教育」を区別し、教育内容（指導方法を含む）においても特色を出して実践に務めたのは、3代目の学院長であった宮地伝三郎氏（京都大学名誉教授）である。

関西文理学院がめざしてきた教育は、合格に必要な学力とともに、未来への視野を持ち、知力と豊かな心を兼ね備えた学生として大学へ送り出すことを目標としていた。

「学ぶ意欲のあるものに就学の機会を」という、



父母と連携して「進学者教育」を実践

人文学園の精神を活かし、進学希望者の実力と目標に応じた緻密なカリキュラムを設定しながら、生徒一人ひとりの年間計画の設定、それらに対応したオリジナルテキストの開発など、あくまで生徒を主人公にした受験指導を行ってきた。また、大進研グループのネットワーキングづくりを提唱し、ゆるぎない情報システムで生徒の要望に応えてきた。

さらに特徴的なのは、「受験学習」（成績主義的技法）の指導に終わらず、むしろ受験学習と一線を画した総合的な進学準備への取り組みである。「偏差値」評価に基づいた進路選択・学部選択を指導するのではなく、なぜ学ぶのか、どう生きるのかという哲学的な問いかけも含めて、進学への心構えや思考の基礎力が身につく学院（予備校）の教養講座は、その内容の充実度・講師の多彩さにおいて、他の一般「予備校」の追随を許さないものであった。

そのほか、学園の誇るべき伝統でもある、生徒や教職員など学園・学院を構成する全員の立場にたった民主的運営を貫いているという点も特徴的である。このことがなければ、職員、講師陣あるいは生徒や父母からの要望や提案による、先進的な教育方針やシステムは実現し得なかつただろう。

さらに特筆すべきことは、学院（予備校）にはわが国の「専修各種学校業界」では稀有な、真に働く者と生徒の立場に立った労働組合が結成され存在することである。全国の私学教育・労働運動に結集し、労働条件の向上はもとより、専修・各種学校教育の地位向上と発展に努めてきた。21世紀に向けての新しい学園創造を展望するとき、このような学園の民主的運営は、欠かすことができないものとなっている。

「私学危機」で予備校事業が危機に

関西文理学院に学んだ生徒数は、開学から2010年3月までの59年間に10万人を大きく超えた。進学先は京都大学はじめ東大、阪大、神戸大、名古屋大に関関同立等、全国の著名大学に入学を果たした。高い進学実績は「カンブリ」の愛称で人気をよび、社会的にも高い評価をうけた。開学期首の3年間ぐらいを除けば、1983年頃までの毎年の募集は、前述の4,480人を最高（1967年次）に、3,000人を割ることはなかった。この頃は、関文理に入学するためには、入学を申し込むだけでなく、「選抜試験」をパスしなければならなかった。それでも、教室に入り切れず、立ち聞き”の生徒が出る盛況ぶりであった。

だが、大手予備校の全国展開が本格化する19

77年以降は、「予備校業界」の「京都市場」におけるシェア争いが激しさを増していく。

一方で、全ての国公立大学が参加する「共通1次試験」（現・大学入試センター試験）がスタート（1979年）し、全国的な入試情報が重視されるようになった。この全国ネットの入試情報サービスが、受験生獲得とシェア争いに、少なからず影響を与えたことはいうまでもなかった。

1977年、関西文理学院は、大阪予備校、一橋学院（東京）、新潟予備校などローカル大手予備校と連携し、全国組織である「大学進学研究会」を発足させた。「大進研模試」をはじめ多様な入試対策事業を実施し、全国的な情報ニーズに応えていった。

そして、浪人生急増期を迎えて大手予備校の全国展開が活発化するなか、京都には駿台に続いて河合塾が進出を窺うようになった。地元の伝統校である関西文理学院は、大手のマスプロ教育と一線を画し、教育理念を具現化している「一人ひとりが主人公」の教育条件を整えるために、立命館大学広小路キャンパスの跡地（一部）に広小路学舎を開設して施設の拡充を図った（1979年）。

さらに、現役高校生の受験ニーズに応えるために、「高校生コース」を開設した（1983年）。現役生へのアプローチを、早めに行うことで効を奏した。又、「関西文理学院情報会計専門学校」の開校（1987年・別項参照）は、大手予備校の攻勢的な京都進出に対する学院側の、教育事業の多角化―総合学園化路線の具体化による対抗策の一つとして、期待をかけていたことは事実である。

しかし、代々木ゼミナール京都校の開校（1988年）に次いで、河合塾京都校と駿台予備校南校が開校したことによって、1989年には、学院の生徒数は1,400名（浪人生）に激減した。予測されたこととはいえ痛手は大きく、学院の維持・存続について危機感を募らせることになった。

1999年から2004年春までの5年間、関文理が京都市内周辺と大津に開設した学びのネットワークとしての「Kinet教室」は、人気を呼んだ。生徒募集の退潮傾向に少しでも歯止めをかける狙いもあったが、関文理自慢の「少人数教室」の機会をより多くの受験生達に利用してもらい、教育効果を挙げるためでもあった。

「Kinet教室」は、鞍馬口本校を拠点とし、市内の周辺に4か所（山科・向日・小倉・桂（のちに花園）、大津に1か所を設けた。講師は本校から出向き、小規模の「塾タイプ」の長所を生かしたアットホームで、質問しやすい授業が、生徒からも親からも喜ばれた。多い時には、400名（各教室合計）を超える生徒達が学んだ。開設時、大都市の予備校としては画期的な「教室」として注目を集めたが、押し寄せる生徒減の波にはいかんともしたがた、5年間で閉めることになった。

さらに事態を深刻化させたのは、1992年をピークに、それ以降は確実に18歳人口の急減がすすみ出したことである。一方、大学行政にも「規制緩和」がすすみ大学数が急増する中、希望する大学にこだわりさえしなければ、「大学全入時代」に入ったことを思い知らされることになった。いわゆる「少子化」傾向の加速による、「大学淘汰の時代」の到来である。



予備校生のサマースクール施設・北アルプス山麓の白馬山荘(1974年建設)

このような「危機」の進行を背景に、関西文理学院だけでなく大手校を含む他の予備校も生徒減に歯止めがきかなくなった。関西文理学院も一時盛り返したものの(89年比) 1995年には1,559名と低迷し、2004年以降、遂に1,000名を大きく割るに至った。ここに来て、学院(予備校)の経営維持はもとより、生徒に対する必要な教育サービスも後退・縮小せざる得なくなり、教職員にとっては胸の痛い毎日が続いた。(2006年3月、連合提携校であった大阪予備校は早々に幕を閉じた。)

大学法人への発展統合で「新生・関文理」をめざす

学園理事会では、1995年頃から学院(予備校)の将来見通しについて徹底した議論を行い、早晩このような困難に直面することになるであろうことは、既定の事実として想定していた。そして、最悪の事態、すなわち学院(予備校)を閉校せざる得なくなった場合でも、60年間に近い貴重な教育経験と遺産を発展的に引き継いで、今後の学園事業に活かしていく方向性について、検討を重ねていた。

とくに、2006年以降は理事会・評議員会のたびごとに重要な議題にのぼり、集中的にかつ真剣に議論された。そして2009年3月の理事会において、次の基本方向を決めることになった。

すなわち、2010年度の早い時期に、学校法人・関西文理学園を長浜バイオ大学の学校法人―関西文理総合学園(大学法人)に、発展的に統合する「組織・再編成」を行うこと。その際に関西文理学院(予備校)の幕をいったん閉じ(閉校)、大学法人の合意のもと未来志向で「新生・関文理」をめざすという、次なる新しいステップに踏み出していくことであった。

しかし、このような方向性について、理事会及び教職員が納得し合意するまでには、相当の時間がかかったことはいまでもない。

学院(予備校)と学園の危機的な状況については理解しつつも、歴史のある学園と学院の維持・継続の方策について、社会的使命の果たし方、学園の将来計画と実現性、教職員の雇用問題等々、いずれも一朝一夕では片のつかない多くの意見と懸念が出されたからである。結果、理事会では当初、基本的には2009年3月末をもって学院

(予備校)の閉校を確認していたが(評議員会では検討中のまま)、結局、さらに1年間延長して最後の踏ん張りを試みることにし、経過を見守ることにした。

しかし、生徒減は依然として止まらず、赤字による負債はさらに増大。このままでは、学院は経営的に破たんし、関文理自慢の「教育力」を維持し保証できなくなることが憂慮された。学院(予備校)の維持・運営の努力は全てにおいて限界を越え、手に負えなくなったという厳然たる事実を、明白に突きつけられる結果となった。

わが国の教育史上貴重な遺産と教訓を将来に生かす

かくして2009年3月の関文理理事会は、前述の基本方向に沿って、2010年3月末をもって両法人の発展的統合と併せて学院(予備校)の閉校を決めた。京都における本格的な「予備校事業」の先き駆けとなり、「進学者教育」なるユニークな教育方針を掲げて、中等教育から高等教育への移行期に必要な学力の向上と、人間形成に必須の豊かな教養を身に付ける教育機関として果たしてきた役割は、わが国の教育史上においても貴重な遺産と教訓を残すものとなった。こうして、人文学園以来60年余の栄光の歴史は関西文理総合学園へと引き継がれることとなった。(専門学校・バイオカレッジ京都も同時期に閉校することになった。別項で詳細説明)

第2章

人文学園の理念と伝統を活かした 関西文理学園の総合的な教育事業

総合的な学園づくりで新時代を担う人材育成へ

「進学者教育」を特徴とする関西文理学院の予備校事業が軌道に乗り、本格化していく中で、学校法人化の取り組みも進み、1954年（昭和29年）に学校法人・賀茂川学園の認可がおりたことは先に述べた。法人の立ち上げには、繰り返しになるが人文学園創立時の中心メンバーであった浅井清信氏（理事長）、新村猛氏、住谷悦治氏らが役員として尽力した。さらに、1979年には河原町広小路に新校舎（後に専門学校・バイオカレッジ校）を立ち上げ、2年後には理系専門の校舎とした。予備校事業の拡充が進むのに応じて、1983年（昭和58年）学校法人名を関西文理学園に変更した。「園」と「院」の一字違いで紛らわしいが、ここに学校法人関西文理学園の予備校である・関西文理学院が名実ともに整えられ、新たなスタートを切ることになったのである。

もともと、人文学園は設立時から、音楽・絵画・工芸の三部門を設けていた。これは、戦争の時代、天皇と軍事一色に塗りつぶされ、真の国民文化の形成が抑圧下に置かれていた事態から青少年や社会人を解放し、戦後の新しいヒューマニズムに基づいた、国民文化を創造するに必要な素養を培うためであった。関西文理学園はこの、人文学園設立の精神と教育理念を継承発展していくために、予備校事業にとどまらない「文理融合」による全人教育を掲げて、総合的な教育を実践する学園づくりの具体化を目指した。

1 情報・経理の専門技術者の養成——会計・ビジネス系専門学校を開設

1980年代、「高度情報化社会」とも「産業社会」とも言われる時代に入って、情報・経理の専門技術者の不足が社会問題化し、その大量養成が求められていた。総合学園づくりをめざす関西文理学園は、時代の変化が要請する教育ニーズに応えた専門教育事業の第一弾として、1987年4月、「関西文理情報会計専門学校（2年制）」を設立した（初代校長・鮎子田耕作氏）。学科コースは「経営経理コース」「情報経理コース」「公認会計士受験コース」の3コースを、2年制で開設した。その後、国際化の時代の到来を見越して、貿易系のコースも増設していった（1996年に「京都国際ビジネスカレッジ」と校名変更）。開校時には、立命館大学や地元経済界を代表するトップ（日本電産株永守重信氏など）から、お祝いのメッセージが寄せられるほど、大きな期待が集った。

1999年、学校経営が困難に陥っていた、京都の歴史と実績のある経理系専門学校である関西経理学校を、京都府文教課の行政指導もあって吸収合併し、「専門学校ビジネスカレッジ京都」と改名して再スタートを切った。

本校における専門教育で次の二つの教育事業は、関西文理学園ならではの先駆的で、ユニークな取り組みであった。

その一つは1996年、京都国際ビジネスカレッジに「国際貿易ビジネス学科・中国ビジネスコース」を新設したことである。日本人生徒とともに中国東北地方（主として東北大学・



再スタートを切った専門学校ビジネスカレッジ京都

遼寧分校）から留学生を受け入れたことにより、わが国の専門学校では先駆的な国際コースとなった。環日本海経済交流の発展を視野に入れた、期待の新設コースであり、1998年4月には一年制の専攻科も設けた。入国管理をめぐる厳しい規制等で、留学生の確保が年ごとに難しくなり、実質10年間で、当該コースを閉じざるを得なくなつたが、受け入れた留学生は総数で100名を超えた。

また、2004年には「高等課程」（3年制・高校卒業資格取得）を設置し、既設の商業実務専門課程（2年制）とリンクして、一貫教育によるハイレベルの会計・コンピュータ教育をめざした。これは、事実上「義務教育化」している高校教育の場で、「不応」現象を起している不登校の生徒たちに、学ぶ機会を保証し提供するものであった。自立して生きていくためのキャリアと人間力を養うことを目的とした、関西文理学園らしい課

程として期待された。

しかし、2008年3月末、少子化を背景とした私学危機の進行、とりわけ大手校の京都進出（大原簿記法律専門学校や八洲学園など）、加えて4年制大学の専門学校領域へのシフトによる生徒激減によって、学校を維持することが極めて困難となり、廃校することになった。ビジネスカレッジ校は、地元京都の生え抜きの歴史のある学校であったことから、他の関係校が姿を消していく中であって、多額の赤字を出しながら「地元校」の名譽にかけて、維持・存続に努力したことはいうまでもない。

それだけに、行政はもとより多くの卒業生や高校サイドなどから閉校することが惜しまれ、理事会では断腸の思いで廃校を決議することになった。

最後に付言したいことは、ビジネスカレッジ校が京都府専修学校・各種学校協会に役員を送り、府下の全専門学校事業の振興と発展のためにリーダーシップを発揮してきた事実である。

2 バイオテクニシヤンの養成—専門学校・バイオカレッジ京都を開校

1993年4月、「専門学校バイオカレッジ京都」の開校は、宝酒造（株）バイオ事業部（現・タカラバイオ（株））からの関西文理学園に対して「協同して立ち上げませんか」とい



ユニークさが注目された専門学校バイオカレッジ京都

う、呼びかけに積極的に応えることによって実現した。

これは、宝酒造側の、わが国におけるバイオテクノロジーの決定的不足が、バイオについての研究開発と産業化を遅らせているという認識と、本学園の「これからはバイオの時代」という認識が全く一致したことによる成果であった。

学科コースは「バイオ工学科」と「バイオ秘書学科」の2学科を設けて、定員は160名、2年制でスタートを切った(但しバイオ秘書学科(定員40名)は、生徒募集がふるわず5年後に募集停止した)。学校校舎は予備校の鞍馬口への統合で空いていた広小路校舎を活用することになった。バイオ工学科には遺伝子工学、蛋白質工学、細胞工学の3コースを設け、2年後にはバイオ情報コースを新設、4年後には新しく蛋白コースを食品コースに改編、97年にはバイオ情報コースを廃し、植物工学コースを新設した。日本の専門学校レベ

ルでは、最高水準の授業(実習)を行い、高い評価を得た。

2007年には、安全・健康志向の社会的ニーズに応えるため、「農業創出工学科」を新たに立ち上げるようになった。だが、育種育成実習など注目されたが、準備不足と「エコ時代」の波に乗るには少し早くて生徒募集にはつながらず、結局、開設に踏み切ることが出来なかった。全国の専門学校で、バイオ系単科の専門学校は本校が唯一であった。類似の学科をもつ専門学校も全国に数校しかなく、そのユニークさが注目され大きな話題をよんだ。

宝酒造の研究開発の成果を教科と実習に活かし、ハイレベルな実習施設を整えた。産業界等からは、バイオテクノロジーの専門技術者の養成を目指した、「産学協同」の先駆的な学校づくりとして、大きな期待が寄せられた。

21世紀の科学技術を代表するバイオの専門教育に、関西文理学園が取り組むことは、時代の求める教育ニーズに的確に応え、必要な学びの場を提供するという、創立以来の理念と伝統に基づくものであった。

「産学協同」でユニークな教科と学校経営

時あたかも、政府が「バイオテクノロジー戦略大綱」(2002年12月)を発表し、バイオの研究開発と産業化についての関心が、全国的に高まっていた。学生募集も、開学企画段階

では定員の確保に不安もあったが、まずまずの充足状態でスタートを切った。初代の学校長には、高浪満氏（京都大学名誉教授・かずさDNA研究所副理事長）が就任（非常勤）し、全国初のバイオ系専門学校にふさわしい、先進的で専門的な指導に当たられた。

又、産学協同の特色を活かした学校の運営管理を実施した。法人理事会のもとに学校の教学、組織運営、財務含めて関係する管理幹部による「経営委員会」を設置（関文理側、宝酒造側から各2〜3名の役員クラスが委員として参加）して、実効性の高い考え方や方針による経営で成果を上げた。専門学校領域における、このような運営スタイルは全国的にも稀有であり、その成否が注目された。

なお、バイオカレッジ校で本科授業以外に実施した、社会人向けの実習講座「テクニカルワークシヨップ」は、好評裏にのべ38回（93年〜08年・毎年1〜2回、2〜3日間）開催し、成功した。PCRの原理や条件、DNAチップ、遺伝子関連技術などの多岐にわたるテーマを取り上げて、実習と講義で教え、のべ1,352人が参加した。講師はタカラバイオからの協力も得、参加者は、医師・歯科系はじめ病院の検査技師、製薬、食品等の検査関係者が多くを占めた。この成功経験は、「長浜バイオ大学京都キャンパス」の新規事業に活かされることになった。

「少子化」と大学との競合で生徒激減

だが、学院（予備校）同様、「少子化」の影響と、2003年に長浜バイオ大学開学と相前後して、他大学によるバイオ系学部と学科の新・増設が相次ぎ、専門学校レベルの学生募集は年ごとに減っていった。経産省の予測通りに、「バイオ市場」の伸びが進まなかったことも影響したことは事実である。

学園理事会では、2003年度に長浜バイオ大学の開校を企画し準備に入った時、京都のバイオ校と並存出来るかどうかについて、楽観視はしていなかった。万が一、並存が困難な場合には、大学経営を優先し、バイオ専門学校の実績やノウハウ・施設等を事実上、大学に引き継ぎ、発展的に活かす方向を決めていた。2008年度の募集は、遂に定員の3分の1まで落ち込んだ。理事会では、バイオへの教育ニーズは高いこと、再生・発展のチャンスは十分あることを再確認し、2010年の早い時期に長浜バイオ大学法人（関西文理総合学園）と関西文理学園が発展的に統合するに当たって、バイオカレッジ校は2010年3月末をもって、いったん閉校することになった。

3 留学生を対象に国際的な進学教育―予備校に国際進学コースを開設

予備校・関西文理学院に新しく設けた「国際進学コース」は通称「国際進学教育学院」とよび、特に海外向けの広報に役立てた。専門学校ビジネスカレッジ京都に設けた（前項参照）

中国貿易ビジネスコースの教育の実績を活かし、特に留学生向けの日本語教育のニーズに応えるため、2000年4月に開設した。開設に当たっては、京都府文教課の行政指導もあって関西文理学院（予備校）の「国際進学コース」として公認され、カリキュラムは、日本語教育に重点を置いたユニークな大学進学教育を特色とし、留学生から好評を得た。

しかし、入国管理行政の規制強化等のしわ寄せを受けて募集が振るわず、短命に終わった（実質6年間）。本コースの開設は国際化時代に役立つ人材育成をめざす学園の理念を、実際の教育に活かしたものであり、その後開学した長浜バイオ大学に、その経験が引き継がれていった。



留学生たちのニーズに応えた「国際進学教育学院」

第3章

初めて大学事業に挑戦 全国で唯一のバイオ系単科大学を開学

文科省へ申請時の難題と困難

関西文理学園は、90年代末に入り私学危機が進行する中、既設の予備校や専門学校のほかに、危機を乗り越えていくために、短大、四年制大学の開設を含む新しい教育事業の展開を模索していた。折りしも国（経済産業省）が「バイオテクノロジー戦略大綱」を発表し（2002年12月）、バイオテクノロジーの研究開発に本腰を入れる方向が明らかにされて、第2次のバイオブームの到来（第1次は1980年代半ば頃）を予感させた。

最終的に、先行して開設していた「専門学校・バイオカレッジ京都」の閉校時期を除いて比較的、安定した募集実績と強いニーズを踏まえて、「協同」の相手であった宝酒造（株）バイオ事業部（現・タカラバイオ）と提携することが大前提となった。宝酒造の研究実績とその事業成果は、大学開校にとって不可欠の要件であった。まさに「バイオ時代の到来にマッチした先進的な大学づくり」として、理事会は開学を決断した。宝酒造も開学趣旨に賛同し、積極的にパートナーになることを約束してくれた（但し開学約2年間で、経営上の事情があつて提携は取りやめとなる）。

しかし、大学を新規に立ち上げるといふ大事業には、大きな障害や困難が立ち塞がっていた。第一、时期的にもわが国の大学数は少子化の進行下、過剩傾向が明らかとなっていた。いわゆる「大学全入時代」を迎えやがて、「大学淘汰の時代」に入るのであることが、大学関係者の間では深刻な関心事となっていた。

当然のことながら、理事会、教職員の間では大きな議論をよんだ。大学設立や運営管理については全く経験が無いばかりか、資金も土地も一から計画を立てていくことは、開学計画そのものが無謀ではないか。学園の大部分の資産を賭けるには余りにもリスクが大きすぎるなどなど、もつともすぎる憂慮や懸念する意見が多く出された。

共感をよんだ「開学趣旨」

文科省への大学設置申請に関する相談は、1999年1月から始まった。「私学危機」が行するなか、文科行政上も新設大学許可には厳しい条件が付き、「門前払い」となるケースもあると聞かされていた。本学の場合にも、文科省へ申請をするにあたって、基本的に次の三条件が、どうなのかが問われた。

それは、①先端科学系の教育・研究であること、②定員の三分の一は留学生であること、③福祉・介護系の教育・研究であること、であった。①と②については、まずはクリア出来る確かな手応えを得た（文科省窓口係官とのやりとりで得た、感触的な印象）。のべ10数回にも及んだ文科省における相談・助言・指導を受ける中で、省側から指摘され提起された問題の多くは、予備知識・準備不足もあつて難題ばかりであり、頭を抱えた。何度か、申請自体を諦めざるを得ないと、考えたこともあつたくらいである。

だが、案ずるより産むが安し」で、文科省が申請を「受理」してくれる見通しが得られ、一方で法人理事会と全教職員挙げての努力と熱意が、関係方面を動かし、開学趣旨と計画についての積極的な理解と支持が広がるなかで、実現への明るい見通しが開けた。

開学趣旨については、科学技術立国をめざす我が国で、バイオサイエンスが中心的産業分野として期待されていることを述べるとともに、次の内容に力点をおいて、高らかに謳い上げた。

「進展著しい先端的バイオサイエンスの専門分野の知識及び技術を教育する」～「基礎と応用展開能力を兼ね備えた〈課題探求型〉のバイオ技術者及び研究者を養成する」～又「人文・社会科学の素養による豊かな人間性並びに生命の尊厳と倫理を涵養し、理性と創造性を兼ね備えた〈行動する思考人〉を育成し」～「持続可能な社会システムの構築に貢献する」～同時に「産業創成型技術」の開発と教育実践に力を入れ、地域社会に開かれた大学」を目指す、こととした。予想通り反響は大きく、社会的にも共感をよび期待を集めた。

「公民協力量」で「産官学」による大学実現へ

開学立地については、先発の立命館、龍谷大の成功経験に学び、滋賀県下の京都に近い自治体の誘致を求めていることもあって、先ず滋賀県の理解と支援を得ることが不可欠の要件

であった。幸い、当時の国松知事の積極的な理解を得ることが出来て、誘致について県下の自治体に話をもちかけていただいたことで、弾みがついた。

結果、紆余曲折はあったが、最終的に長浜市が大学誘致を決断してくれた。2001年2月20日、川島市長が関西文理学園の吉田保理事長を訪問し、その旨を正式に伝えた。同時に滋賀県も、積極的に支持し、支援することを約束してくれた。開学計画の具体化に目途がつき、「実現間違いなし」の確信と感動が得られた瞬間であった。

開学をめぐる最大の困難は、資金問題であった。これも、長浜市と滋賀県が「特例的な措置」で建設資金の2分の1を補助金で提供してくれることになり、調達に目途がついた（あと2分の1は関西文理学園の自己資金と寄付金で）。土地は、この補助金を活用し、事実上、無償で提供された。湖北地域の人々の積年にわたる大学誘致実現への切実な要望が県を動かし、北部地域開発施策の重要な一環として実現したといえる。

さらに、長浜商工会議所はじめ、地元経済界とバイオ関係企業の支持と支援も得られ、大学の開学と運営管理に協力を惜しまない趣旨のもと「長浜バイオ大学サポーターディング・コンソーシアム」が結成された（バイオ関係企業を中心に約100社参加）。

又、開学資金の調達と同様に重要で難しい問題として、特色のある教学と研究の内容づくりに加えて、体制づくりがあった。とくに激烈な大学間競争の中で、優位性を保障すること、はもちろん、初めて開学する全国で唯一のバイオ系単科大学を誇示できる、高度の水準と内容と体制（システム）づくりが求められていた。初代学長となった大阪大学名誉教授・元蛋



日本で唯一のバイオ系単科大学の長浜バイオ大学

白質研究所所長の下西康嗣氏が、開学2年前から陣頭指揮にあたり、教育・研究関係スタッフの協力のもと、教学方針づくり、教員の確保、教育・研究施設等の設計と設備に全力を傾注した。

かくして「公民協力型」で「産官学」の連携による大学づくりが現実のものとなってきた。

高倍率の入学生で晴れて開学、スタート切る

長浜市が大学誘致を決めたことを受けて、2001年2月に、「長浜バイオ大学設立発起人会」が設立された（琵琶湖ホテルで総会）。発起人には京都銀行・柏原康夫頭取、滋賀銀行・高田紘一頭取はじめ宝酒造（株）バイオ事業部門、丸紅（株）、武田薬品工業等の社長・会長・相談役等、22名が名を連ね、各界からの大きな期待と支持が寄せられた。

そして早速、2001年4月に「財団法人・長浜バイオ大学設立財団」設立の申請を文科省に行い、同年5月に許可が下りた。つづいて翌年の2002年4月、大学法人としての「学校法人・関西文理総合学園」の設立申請を行い、同年12月に正式に認可された。初代理事長は、大学開学の母体となった関西文理学園・理事長吉田保氏が兼務で就任。又、初代学長は既述のとおり下西康嗣氏が就任した。

大学の校地は、長浜市のJR田村駅（歩いて2分）に設けた。通学には極めて便利であり、「JR駅前大学」が入試広報のポイントとなっている。開校時の校地面積は39,996.3

2㎡、校舎延べ床面積は12,936.67㎡であり、その後、新たに校地として隣接地（自動車教習所の跡地・面積10,750.66㎡）を買収。又、大学院棟（延べ面積2,418.92㎡）と新学科棟（同2,397.31㎡）を増設して、現在に至っている。開学前の校地は、一面が田園であった。東に伊吹山の雄姿を仰ぎ、西に琵琶湖が広がり、はるか遠くに比良の山々を望む、絶好のロケーションである。

学生募集は、計画当初、京阪神に遠い湖北地方では不安視されていたが、公民協力型の全国初のバイオに特化した大学であることが、マスコミなどによる広報で大きな関心を集めた。2003年4月1日の入学式には、想定を大きく超えた志願倍率で優秀な学生が入学を果たし、待望の開学と夢ふくらむスタートを盛大に飾った。その後も、志願者の増減は見られるものの、定員を大きく上回る募集成果を維持している。



地元市民をはじめ150人が参加するなど熱い期待をあつめた開学フェスティバル
湖北1市12町から寄贈された「湖国の森」でテープカット



開学パーティーには地元・各界から400人が参加
開学時には海外を始め全国から見学者が訪れた

「学園創立の理念と伝統生かし、 「行動する思考人としての高度バイオ人材」の育成へ

教学理念は、いうまでもなく人文学園創立以来の精神と志を、バイオ大学に具現化し、「世界に通用する・行動する思考人としての高度バイオ人材」の育成を掲げ、同時に高い水準の研究実績を上げて本学ならではの優位性を発揮し、教学の目的達成をめざすことになった。

開学時の学部・学科構成は、バイオサイエンス学部・バイオサイエンス学科（定員・198名）の一学部一学科でスタートを切り、2007年4月には大学院バイオサイエンス研究科（修士課程30名・博士課程5名）を開設した。さらに2009年4月には、アニマルバイオサイエンス学科（定員・50名）とコンピュータバイオサイエンス学科（定員・40名）の新学科を開設し、バイオサイエンス・テクノロジーを「総合的」に学び研究できる大学となった。

また産官学連携による長浜バイオ大学を核とする、「長浜バイオサイエンスパーク」実現の事業（別紙参照）も、2010年度中には完成する目途が立つまでに進展した。これにより、バイオによる地域開発を加速させ、同時に、実学本位の教学の特色を活かし、教育・研究内容の充実と発展に成果を上げている。

開学7年目の本学の実績と到達点（2009年5月1日現在）は、組織現勢として学部生総数1,051名（1〜4回生合計）、大学院生90名（修士・博士課程合計）、教員54名（専

任)、職員36名(嘱託・契約含む)。かくして教育・研究の充実ぶり、諸施設の整備状況とその内容・水準ともに、開学7年で目標を基本的に達成し、大学開学の土台づくりを成し遂げた。

本学の開学で長浜市の悲願達成

大学を誘致した長浜市にとっては、まさに悲願の大学が実現したことを意味した。湖北地域の教育・文化の振興を図り、なにより地域の経済活性化の拠点づくりの願いに応えるものであった。市としては1982年1月に「長浜市大学誘致推進委員会」を立ち上げて以来、成安造形大学等への誘致活動や、市が独自で「長浜総合リハビリテーション大学」を創る構想の実現などを図ったが、いずれも陽の目を見るまでに至らなかった。

それだけに、本学開学は地元の長年の夢が実現されたことを意味し、大学実現に向けて、川島市長を先頭に、市役所の担当部局はもちろん、地元田村自治会の皆さん等、全市を挙げて取り組んでいた。いうまでもなく、県・市からの補助金が得られたのはその成果であった。したがって、本学開学への期待は大きく、それにどう応え実現していくかが、本学の課題となっている。

この項の最後になったが、本学校舎の建築、実習・研究機器等の設備工事を担当していたところ、入学式は2003年4月1日と決定していたから、文科省の遅れ気味の申請経過もあり、完成までの工期は約1年間しかなかった。まさに無謀としかいえないような短期間で、完成させねばならなかったのである。業者からは湖北地方では避けられない冬の降雪次第では、入学式に間に合わないリスクがあることを、考えに入れておいてほしいといわれていた。

だが、業者の皆さんの頭の下るようなご努力に、昼夜を問わない「突破力」を發揮してもらい、数々の障害と制約を乗り越え完成にこぎつけることが出来た。

業界や先輩大学の経験からも、本学のような小規模校の場合でも、大型でしかも精密な実習・研究機器を設備する大学建設には、起工から完成まで約2年間の工期が必要だと聞かされていた。

ところが、入学式は2003年4月1日と決定していたから、文科省の遅れ気味の申請経過もあり、完成までの工期は約1年間しかなかった。まさに無謀としかいえないような短期間で、完成させねばならなかったのである。業者からは湖北地方では避けられない冬の降雪次第では、入学式に間に合わないリスクがあることを、考えに入れておいてほしいといわれていた。

だが、業者の皆さんの頭の下るようなご努力に、昼夜を問わない「突破力」を發揮してもらい、数々の障害と制約を乗り越え完成にこぎつけることが出来た。

大津から近江八幡を経て長浜に至る湖岸道路沿いの建築物の中で、本学の建築デザイン、造形美、機能性、自然景観との調和など、地元の皆さんからは際立って目立つ素敵な学舎であると、お褒めの言葉を頂戴していることを付言しておきたい。

内外の大学との交流・連携の進展

—国際交流活動と、滋賀医科大学との戦略的連携事業

2008年に長浜バイオ大学は、滋賀医科大学との「びわこバイオ医療学」の創出を目的とした戦略的連携協定を調印し、その連携の一環として共同大学院の開設をめざして、両大学による連携事業を推進している。この戦略的連携事業は、中国・東北大学も加えた「三姉妹校」による国際連携活動も視野に入れた戦略事業として、期待も大きく注目されている。

また、本学の国際交流活動のデビューは、2004年11月本学で開催した「第1回アジア・バイオ国際シンポジウム」から始まった。本学の開学1周年を記念し、アジアの大学間ネットワークの形成をめざした事業であった。シンポには、アジア地域のバイオサイエンス研究をリードする清華大学（中国）、シンガポール大学、釜慶大（韓国）、カセサート大学（タイ）から7人の著名な研究者が参加し、大成功を収めた。

2006年から本学は、釜慶大と釜山大学2校と



滋賀医科大学との大学間連携協定の調印式

交互に会場を変えながら、日韓学生交流を毎年開催している。長浜バイオ大学の大学院生を中心とした研究成果の発表と、交流を通じてグローバル化時代に応える国際感覚と、世界に通用する人材育成に役立っている。

また、中国・東北大学とは「ビジネススカレッジ京都」時代の留学生交流の実績を踏まえて、2008年に学術交流協定を締結し、それによる学部交換留学が2009年9月から実現した。バイオ系の留学生2名（但し1名は09年12月に事情があり帰国）を受け入れている。

産官学の連携から生まれた「長浜サイエンスパーク」

滋賀県、長浜市は、長浜バイオ大学を含むエリアを「長浜バイオ・ライフサイエンス特区」に認定した（2004年7月）。さまざまな助成や立地促進の制度により、大学に隣接する長浜サイエンスパークの全区画に進出企業が決まり、2010年2月1日現在、社屋起工中ふくみ3社が進出を終えた。既述のとおり同年度内には全社が進出を終えて勢揃いし、完成する。これは、長浜バイオ大学開学の目的の一つであり、「産官学」による学術の発展と産業振興への貢献を掲げた本学の努力が、実を結んだ結果である。大学を核とするバイオサイエンスパークが実現した、全国初の成果となり、その先進性が高い評価を受けている。

産官学による本学の開学とパークの実現には、「バイオビジネス創出研究会」との協同によ

加藤登紀子さんがつくった校歌

本校の校歌「悠久の街」は、環境問題に理解が深く、革新志向の知性派歌手として有名な、加藤登紀子さんに依頼して、作詞・作曲してもらったものである。大学名が歌詞の中にでてこないことで異色であり、市民からも第二の「琵琶湖周航の歌」として親しまれている。未来につながる悠久の流れの中で、歴史と自然に恵まれた長浜の地で学ぶことに抑えがたい高揚感が湧いてくるといえないか。

入学式や卒業式など大学の代表イベントでは、吹奏楽部と合唱団のメンバーにより演奏され、参加者全員で合唱することが恒例となっている。

悠久の街 | 長浜バイオ大学・校歌 作詞・作曲 加藤登紀子

空と大地がとけ合う水辺
過去と未来が出逢う今

この街で暮らした毎日を 僕らはきっと忘れない
大切な人とめぐり逢い はじめての自分を見つけた

夢にみるあしたに とどかない夜も
弱すぎる自分に 泣けてくる朝も

生きている さがしてる
素晴らしい明日 この手でつかむまで
いつの日か夢を とげるまで
悠久の街 長浜で今 生きている

夕陽が沈む光の中 僕は今日も走っていく
自転車の音と波の音が 風の中でうたってる

遠い日の思い出 過ぎていく時間
花開く春も 凍りつく冬も

忘れない 何もかも
素晴らしい今日の 二度とない時を
いつの日か遠く はなれても
悠久の街 長浜をずっと 忘れない

空と大地がとけ合う水辺
過去と未来が出逢う今

る取り組みが大きく貢献した。研究会は、本学の開学と呼応して設立された、地元の「民」を代表する唯一のバイオビジネスの創出をめざす組織であり、2009年に一般社団法人となった。

サイエンスパーク内には、産業化に向けたバイオ研究開発を支援する、「長浜バイオインキュベーションセンター」があり、長浜バイオ大学関係（本学の教授の研究成果を活かした企業づくり）のベンチャー企業3社（うち1社は08年度撤退）を始めとする「医療・創薬・健康」「アグリバイオ」「環境」などの分野のバイオベンチャーが入居し、バイオの研究開発の「発信基地」となっている。同時に、実学本位の長浜バイオ大学の教学の特色を名実ともに保障するために、欠くことの出来ない施設であり教育環境づくりに役立っている。

第4章

更なる発展をめざす学園のビジョンと 長浜バイオ大学の課題

21世紀の教育・研究課題に真正面から取り組む学園へ

関西文理学園グループは、1946年に開学した京都人文学園の建学の精神、「平和とヒューマニズム」を何よりも尊び、豊かな人間性と科学的合理主義の思考力を兼ね備えた「行動の人として思考し、思考の人として行動する」近代人の育成を目指す教育理念を堅持してきた。この基本理念を、21世紀が要請する教育の今日的課題、すなわち「環境・科学・平和・国際・福祉・人権」に関する教育に具現化することに努めてきた。

そして、長浜バイオ大学においては、現在の世界を覆う未曾有の経済危機はもとより、地球規模の全面的な危機が進行するもとで、持続可能な人類社会の構築と発展に貢献できる教育・研究を実践している。換言すれば、「環境世紀」を拓き、その進歩発展に寄与する「世界に通用する行動する思考人としての高度バイオ人材の育成」であり、バイオ研究活動の発展である。

関西文理総合学園と長浜バイオ大学はこのような、21世紀の教育課題に立ち向っていくため、組織的に2010年度の早い時期に、大学の設置母体となった「姉妹学園」である関西文理学園（本部・京都市）を大学法人の関西文理総合学園に発展的に統合することになった。そして、人文学園の理念に基づいた、「文理融合」の教育方針による、多様で総合的な教育事業を展開していくことをめざす。

両法人の統合により、本学に寄付される京都の教育施設を有効に活用し、わが国屈指の学術研究都市である京都の有利な条件を活かした、「長浜バイオ大学・京都キャンパス」の新設を実現させること。これは、両法人の統合による新しい学園事業の展開と、長浜バイオ大学の発展・拡充による「新生・関文理」を創り出していくステップアップの基点とし、活力として、持続的な発展をめざす新たな教育・組織基盤を固めていくことを目指している。すなわち、京都人文学園創立以来の誇るべき伝統と実績を、21世紀の新しい時代が求める教育・研究課題に「野心的」に挑戦し、取り組んでいく意志と将来展望を示したものになるはずである。

総合的な学園事業のビジョンを示し、「文理融合」による多様な教育事業めざす

2010年4月、開学8年目をむかえた長浜バイオ大学は、この間の教育・研究実績の成果を踏まえて、日進月歩のバイオ技術の革新が求める教育・研究ニーズに伝えてきた。そして、新たな課題に挑戦を試みることになった。優秀な教育・研究人材の育成と確保、教育・研究設備の充実や新学科（学部）の創設、研究活動の進化・発展、研究所・大学院大学の建設などの諸課題を、意欲的に取り組んでいくことになろう。

さらに、これから学園が新しく着手していく教育事業は、「理系・バイオ」の大学事業にと



中国・東北大学との学術交流協定の調印式

どまらず、「人文・言語系」の多様な教育事業にも新しく着手していくことを視野に入れ、人文学園創立以来の総合的な教育課題に応える、学園事業の実現をめざしていくことにしたい。国際的な規模（中国・東北大学などと連携）で展開していく、未来志向の戦略構想を描いていくことも重要な課題になっている。

今や、時代が歴史的な大転換と革新を求めているなか、関西文理総合学園が未来志向で学園事業を引き続き進化・発展させ、社会的使命を果たしていくことは、まさに新時代の教育要請に応えて前進していくことにこそ、あることに確信をもちたい。

ここで、京都人文学園の創立趣旨の中から次の一節を紹介し、今日的な意義を改めて再認識しておくことにしたい。そこには、軍国主義と戦争を支えた国家主義教育への批判と反省が語られた上で、次のように記されている。

「自ら国家のために、しかも究極においては他国との闘争のために役立たせるためにのみ幼い者、若い者を養成し教育してきた偏狭を矯めるには、人類のために、生きとし生けるものの福祉のために尽くすべき世界公民の扶育を念願する人文主義の精神による教育において、他に勝るものはなからうと信じます。」

今日、地球と人類が直面している危機の本質は、近・現代の歴史における政治・経済・文化等のすべての領域で、生きものへの慈しみ、人間の尊厳と平和、豊かな暮らしと福祉、環境保全等を、何よりも重視する価値観が失われたも同然となっていることである。悪しき「資本」と「戦争」の論理がまかり通り、政治・経済（社会）体制が大きく揺れ動き、人類

社会の持続的な発展を危険にさらしている現状は、これ以上黙視しているわけにはいかないだろう。

すなわち、バイオを含む先端の科学技術の発展も、人間の尊厳を第一とする政治と倫理と道義が失われた時、広島・長崎の実体験が物語る、原子力開発の驚異的な研究とその技術的成果が人類全滅の大量（破壊）殺人兵器と化してしまいかねないという、歴史的な教訓を厳粛に受け止めること。そして、この史上空前のハイリスク時代に生きていく現実を、人類の英知―「教育の力」でもって、革新し転換していくことが、喫緊の最重要課題になっている認識を、人々の感性と知力を総動員して自覚化していく、ことではないだろうか。

既述した京都人文学園の創立趣旨書の一節は、今日、教育・研究に携わる者はもちろんのこと、広く世界の人々に啓示的に深い示唆を与えていると考えたい。

関西文理学園グループの沿革

- 1946(昭和21)年 京都人文学園創立。9月、各種学校として認可される
- 1949(昭和24)年 京都人文学園夜間部開設
- 1950(昭和25)年 京都人文学園昼間部閉鎖
- 1951(昭和26)年 京都人文学園が「昼間部」を閉じるにより、新たに学園の理念を活かし、校舎を利用して大学進学のための教育機関として関西文理学院を設立
- 1952(昭和27)年 関西文理学院、京都市北区烏丸通鞍馬口に移転
- 1954(昭和29)年 学校法人・賀茂川学園認可される
- 1957(昭和32)年 京都人文学園「夜間部」は京都勤労者学園と名を変え、働く人を対象にした教育を行う
- 1979(昭和54)年 関西文理学院広小路校(京都市上京区河原町広小路)開校
- 1983(昭和58)年 学校法人賀茂川学園から学校法人関西文理学園に名称変更
関西文理学院高校生コース開設
- 1987(昭和62)年 関西文理情報会計専門学校開校(京都市上京区河原町今出川下る)
- 1992(平成4)年 関西文理学院鞍馬口校に統合、広小路校廃止
- 1993(平成5)年 バイオカレッジ京都開校(旧関西文理学院広小路校を改修)
- 1996(平成8)年 関西文理情報会計専門学校から京都国際ビジネスカレッジに校名変更
- 1998(平成10)年 関西経理学校合併
- 1999(平成11)年 京都国際ビジネスカレッジから専門学校ビジネスカレッジ京都に校名変更
旧関西経理学校校地に移転、統合
- 2000(平成12)年 関西文理学院国際進学コース開設(旧京都国際ビジネスカレッジ校舎を改修)
- 2003(平成15)年 滋賀県、長浜市、企業の支援を受け学校法人関西文理総合学園が新たに認可
滋賀県長浜市に長浜バイオ大学開学
- 2004(平成16)年 専門学校ビジネスカレッジ京都に高等課程設置
- 2006(平成18)年 専門学校ビジネスカレッジ京都、関西文理学院国際進学コース校舎に移転
専門課程、高等課程とも募集停止
- 2007(平成19)年 バイオカレッジ京都に農業創出工学科新設
専門学校ビジネスカレッジ京都旧丸太町校舎売却
長浜バイオ大学に大学院開設
- 2008(平成20)年 専門学校ビジネスカレッジ京都、学校廃止認可
バイオカレッジ京都の農業創出工学科廃止
- 2009(平成21)年 長浜バイオ大学にアニマルバイオサイエンス学科とコンピュータバイオサイエンス学科を開設
- 2011(平成23)年 学校法人関西文理総合学園に学校法人関西文理学園を統合

「危機」の時代を人類の英知―「教育の力」で革新し転換めざす

この示唆の意味する内容を、21世紀の教育・研究にとつて、最も基本的な人類学的課題として列挙し、提起するならば、次の通り集約することが出来るのではないだろうか。「人権と平和、環境と福祉を何よりも大切にし、そのために研究・科学技術の成果を活かす教育と研究。科学的合理的な思考力を養い、それに基づいて行動できる人材育成」を目的として、実践していくことである。そしてバイオ大学においては、「世界に通用する、行動する思考人としての高度バイオ人材の育成」を、追求していくことになる。

今、長浜バイオ大学と関西文理総合学園は、未来志向のビジョンを掲げて力強く、壮大に、「新生・関文理」の創成と、日本の教育史を飾る、歴史的な第一歩を踏み出していくことにしたい。

資料①

京都人文学園人文科学部本科 講師氏名(1946年)

顧問	新村 出	文博・京大名誉教授
顧問	竹田 省	法博・京大名誉教授
一般教養	新村 猛	京大文学部卒・本学園長
経済学	青山 秀夫	京大経済学部卒・同教授
論理学	久野 収	京大文学部卒・本学園専任
社会学	重松 俊明	京大文学部卒・同学部講師
東洋史	重沢 俊郎	京大文学部卒・同助教授
西洋史	前川貞次郎	京大文学部卒・同学部講師
日本史	藤谷 俊雄	京大文学部卒・京都市史編纂委員
国語学	浜田 敦	京大文学部卒
政治学	佐々木時雄	京大経済学部卒・本学園主事
自然科学	市川亀久弥	京大工学部青柳塾・本学園主事
数学	田中 益造	京大工学部青柳塾
英語	村上 志孝	京大文学部卒
仏語	加藤 美雄	京大文学部卒・大阪商大講師
独語	白井竹次郎	京大文学部卒・京府医大講師

資料②

京都人文学園・特別(課外)講義、各種講座の主要講師一覧(1946～1955年頃)

井ヶ田良治	磯田 進	岩井 忠熊	大河内一男
北山 茂夫	河野 密	古在 由重	清水幾太郎
住谷 悦治	千田 是也	滝川 幸辰	武谷 三男
谷口善太郎	田畑 忍	永井 智雄	中野 政夫
中村 哲	奈良本辰也	沼田稲次郎	羽仁 説子
羽仁 五郎	林屋辰三郎	細野 武男	真下 信一
松田 道雄	宮城 音弥	向井 潤吉	湯川 秀樹
和田 洋一			

(50音順)(本掲・本科講師も担当した)

資料③

学校法人関西文学園歴代理事長・事務局長(賀茂川学園時代含む)

初代 浅井 清信(51～68年、但し当初4年間は設立者・理事代表)※

- 第2代 和田 洋一 (68～70年) ※
- 第3代 富岡益五郎 (70～76年、事務局長・鮎子田耕作)
- 第4代 糸井 一 (76～85年、事務局長・鮎子田耕作)
- 第5代 鮎子田耕作 (85～90年、事務局長兼務)
- 第6代 永原 誠 (90～91年、但し理事長代理)
- 第7代 吉田 保 (91年、事務局長兼務)

※印は、資料不足で役職名と年代に未確認のところあり

学校法人関西文理総合学園役員 (2002年12月法人設立時理事・監事)

- 理事長 吉田 保
- 理事 下西 康嗣 学長 (大阪大学名誉教授)
- 理事 町田 茂 関西文理学院院長 (京都大学名誉教授)
- 理事 外蘭 利治 ビジネスカレッジ京都校長
- 理事 阿部 孝仁 事務局次長
- 理事 永原 誠 立命館大学名誉教授
- 理事 井ヶ田良治 同志社大学名誉教授
- 理事 林 堅太郎 立命館大学教授
- 理事 三輪 泰司 京都造形芸術大学教授 (地域計画建築研究所会長)
- 理事 岡本 康 社会福祉法人丹和会理事

- 理事 加藤郁之進 タカラバイオ(株)代表取締役
- 監事 松岡 正美 立命館大学名誉教授
- 監事 山岸 永一 京都橘女子学園理事長

学校法人関西文理総合学園役員 (2011年12月19日現在理事・監事)

- 理事長 若林 浩文
- 理事 三輪 正直 学長 (筑波大学名誉教授)
- 理事 池村 淑道 研究科長・学部長
- 理事 奥村 忠一 事務局次長
- 理事 河村 能夫 龍谷大学経済学部教授
- 理事 田中 道七 立命館グローバル・イノベーション研究機構顧問
- 理事 三輪 泰司 地域計画建築研究所会長
- 理事 岡本 康 社会福祉法人丹和会常務理事
- 理事 大島 桂典 (株)東レ顧問
- 監事 山岸 永一 京都橘学園前理事長
- 監事 川崎 和彦 (株)バイオコーポ取締役

資料④

長浜バイオ大学設立発起人（2001年2月1日現在）

〈長浜市・滋賀県関係者〉

山田 新二 滋賀県副知事

川島 信也 長浜市長

高橋宗治郎 滋賀県商工会議所連合会会長（滋賀銀行会長）

樋口 松男 前長浜商工会議所会頭（前滋賀県教育委員会教育委員長）

田中 正夫 大学設立推進会議会長（長浜市連合自治会長）

〈経済界〉

加藤郁之進 宝酒造(株)副社長（同バイオ事業部門本部長）

藤野 政彦 武田薬品工業(株)会長

辻 亨 丸紅(株)社長

館 糾 鐘淵化学工業(株)相談役

藤原 菊夫 社団法人京都工業会会長（株）島津製作所会長

柏原 康夫 (株)京都銀行頭取

高田 紘一 (株)滋賀銀行頭取

西嶋 喜紹 長浜信用金庫理事長

〈関西文理学園関係者及び学識経験者〉

吉田 保 学校法人関西文理学園理事長

下西 康嗣 学長予定者（大阪大学名誉教授、同蛋白質研究所前所長）

網澤 進 バイオカレッジ京都校長（宝酒造(株)前ペプチド・蛋白解析受託センター長）

町田 茂 関西文理学学院院長（京都大学名誉教授）

外蘭 利治 専門学校ビジネスカレッジ京都校長

井ヶ田良治 同志社大学名誉教授

三輪 泰司 京都造形芸術大学教授（地域計画建築研究所会長）

田中 道七 立命館大学副学長（BKCBいわこ・くさつキャンパス担当）

高浪 満 かずさDNA研究所特別顧問（同前副理事長、京都大学名誉教授）

以上22名、敬称略

資料⑤

長浜バイオ大学学長（2009年11月1日現在）

下西 康嗣 大阪大学名誉教授

あとがき

2010年4月から、学校法人「関西文理学園」は新しい頁を加えることになりました。姉妹関係にあり長浜バイオ大学を設立し運営する学校法人「関西文理総合学園」（以下：大学法人）と発展的に統合し、未来志向のビジョンのもと「新生・関文理」をめざすことになりました。

これで、「総合」の二文字がついているかどうかの違いこそあれ、同じ関西文理学園の呼称をもった二つの学校法人が、「大学法人」に合体して一つとなり、大げさに言えば学園史の新しい歴史段階へ、確かな一歩を踏みだすこととなります。

今から64年前、いわゆる「戦後」（日本の敗戦）と呼ばれた、時代の大きなパラダイム転換のなかで、まず京都の地から新しい時代の民主主義教育の灯火をともし、国のすみずみに広がることを期して、京都人文学園が設立されました。人文学園は、自由と平和、人間性を何よりも尊いものとする考え方にたつ教学の理念を掲げ、それを建学の精神としました。

そしてこの京都人文学園が、関西文理学園のルーツなのです。私たちは関西文理学園の歴史の歩みや伝統を考える際、ここを源泉とし、出発点とすることが、正確であることはいくまでもありません。

かくして、京都人文学園創立を起点とした、64年間の関西文理学園の歩みは、一貫して創立時の教学理念と建学の精神に導かれ、幾多の変遷を重ねて時代が求める教育事業に、先達の取り組みでできた実績を確認することが出来ることを、誇りにしたいと考えます。

しかし、このような関西文理学園の歴史や教育実績、今日の到達点が示す輝かしい歩みが、どれだけ関西文理関係者や学生諸君に知ってもらい理解されているかと思うと、実に心寒い限りといえましょう。啓発・啓蒙の努力がほとんどされていなかったことも原因の一つです。なによりの問題は、京都人文学園↓関西文理学園の64年間の、概略であっても「通史的」に知ってもらおう文献、関係資料が、責任を持って編まれてこなかったことにあります（1951年予備校・関西文理学院の誕生から30年間の簡単な年表類があるだけ）。

昨今、「私学危機」が進行するなか、関係する大学はもとより中学・高校に至るまで「建学の精神」や「理念」の重要性が強調されています。長浜バイオ大学は今年度4月、開学8年目を迎える若い大学です。大学としての歴史は浅いが、京都人文学園以来の永い歴史と伝統を継承し、幾重にも年輪を刻んだ一本の大本がそびえるように、関西文理学園事業の頂点に立つ大学であることはいくまでもありません。

この4月から、関西文理学園が「総合」の二文字の付いた「大学法人」に、発展的に統合「新生・関文理」を掲げて新しい学園史を創り出していくべくスタートに立った今、学園の歩みを正しく理解し、将来ビジョンと課題を描くことは極めて大切なことです。中国ふうにいえば、「温故知新」（古きをたずね求めて、新しい考え方を知ることの意）です。

この小冊子発行は、これまで「ミニ通史」すらも編めなかつた反省を込めて、手元に残さ

れているメモ的な関係資料や、古くからの関文理関係者からのヒアリングなどを参考に、「概略通史」としてまとめさせていただきました。64年間をブックレット判74頁に収め切ることは、自体が無茶な話であることは承知の上です。多くの不足点、欠落している部分については、今後出版されることになるであろう、本格的な「年史」の発行に期待していただくことになりました。

2010年4月

吉田 保

(関西文理総合学園理事長)

※役職名などは初版時のままで、年や固有名詞の一部誤りを訂正しました。

〈参考資料〉

『京都地方労働者教育運動史』石田良三郎著（1979年 京都勤労者学園）

『鎌倉アカデミア断章－野散の大学』高橋善夫著（1980年 毎日新聞社）

『京都人文学園成立をめぐる戦中・戦前の文化運動』山寄雅子著

（2002年 風間書房）

『関西文理学院創立15周年記念資料』（関西文理学院）

『30年のあゆみ』（関西文理学院）

専門学校・ビジネスカレッジ京都、バイオカレッジ京都、

長浜バイオ大学の学校案内パンフレット類

建学の理念に導かれて

関西文理総合学園の歩みと長浜バイオ大学の課題

2010年4月1日 発行
2011年3月1日 一部補正発行
2012年4月1日 一部補正発行
2013年2月1日 一部補正発行
2014年3月1日 一部補正発行

発行 学校法人 関西文理総合学園

執筆・編集
責任者 吉田 保

〒526-0829 滋賀県長浜市田村町1266番地

TEL.0749-64-8100（代）

<http://www.nagahama-i-bio.ac.jp/>